げんでんふれあい福井

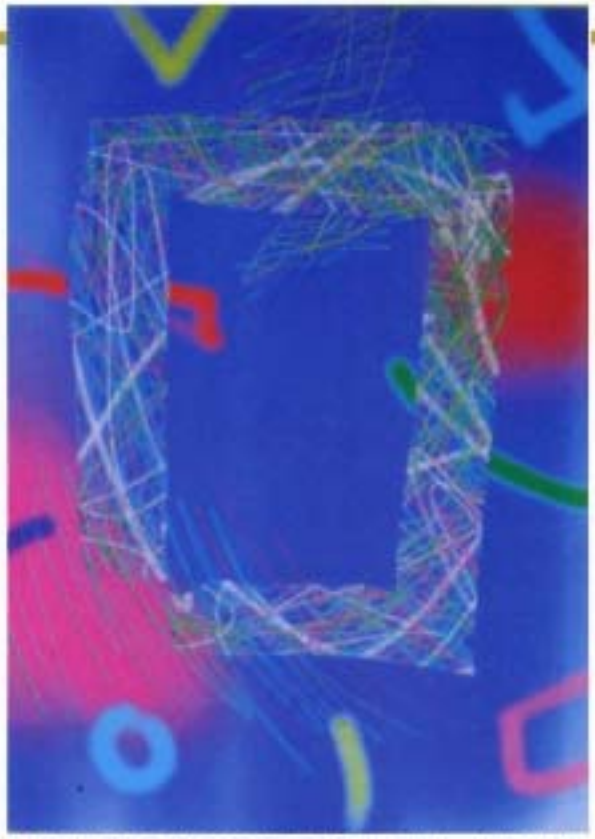
GENDEN FUREAI FUKUI

2004 第19号 SUMMER

●福井市立郷土歴史博物館訪問

●福井の文学碑 越前の里味真野苑 に恋の萬葉歌碑

●ふるさと福井人物シリーズ(1) 松木庄左衛門



『国民文化祭・ふくい2005』総合ポスター原画。公募による最優秀賞作品（デザイン・福井市　門前幸夫氏）

福のくにから　ふくらむ文化　羽ばたく未来

第20回 国民文化祭・ふくい2005」準備着々

大会コンセプトは「糸」

来年秋に県内で繰り広げられる「第20回国民文化祭・ふくい2005」の県実行委員会第3回総会が5月28日、福井市の県自治会館で開かれました。大会コンセプトとして繊維など福井県の文化、産業と縁が深い「糸」とすることに決定。開会式には、「ふくい」文化の源（DNA）である歴史と風土を紐解く「県民ミュージカル」を発表することなどを盛り込んだ事業別実施計画が報告されました。

6月22日には、これら実施計画が東京で開かれた国民文化祭実行委員会（文化庁所管）で承認されました。

今回承認をうけた国民文化祭の事業別実施計画では、開催日は来年10月22日から11月3日までの13日間。シンポジウムや音楽、演劇、伝統芸能、舞踊、文芸、美術などのステージ発表、作品展など県内各市町村の各会場で67事業が行われ、出演者約3万3千人、観客約80万人が見込まれる一大文化イベントとなります。

開会式で県民音楽劇

初日の10月22日、開幕のトップを切って、福井市のフェニックス通りでオープニングパレードを開催。大会コンセプトの「糸」を基軸に、「見る」だけのパレードではなく、様々な立場で「参加できる」パレードを目指し、リボンセレモニーや一本の糸のように繋がるパレード型式で進行します。

同日午後、武生市のサンドーム福井で行われる開会式・オープニングフェスティバルでは、「深まる心、響きあう絆」のサブテーマに添って、開会式典に続いて、「ふくい」の歴史と風土を紐解く県民ミュージカルや世代と地域を越えた人々の交流と絆を謳い上げる音楽ステージが計画されています。

CONTENTS/19

■「第20回国民文化祭・ふくい2005」準備着々　2・3
■福井市立郷土歴史博物館訪問　4・5・6
■シリーズ10・福井の文学碑　越前の里味真野苑　万葉歌碑(武生市)　7
■平成15年度風花随筆文学賞財団賞　作品紹介　8・9
■ふるさと福井人物シリーズ　松本庄左衛門（上）　10・11
■伝統芸能シリーズ　椎村神社の祭り(小浜市)　12
■敦賀市立博物館所蔵逸品絵画　誌上展14「猛虎図」岸駒筆　13
■情報ファイル　(16年度財団助成事業決まる、ほか)　14・15

表紙の紹介

美浜町指定無形民俗文化財

早瀬こども歌舞伎（美浜町）

美浜町早瀬に江戸時代から伝わる伝統芸能「こども歌舞伎」は、今年も5月5日、区内の日吉神社で奉納されたほか、区内各地を巡行する山車の舞台で上演されました。

演目は「寿式三番叟（さんばそう）」で、翁と三番叟2人の計3人が演じます。まず、翁が謡に合わせて金地に松の扇をもって舞い、次に三番叟が袖を巻き込んで、初めは比較的緩やかに、「鈴の舞」が始まると舞台一杯を使って激しく舞います。伴奏は三味線のみ。約5分間舞い「めでたくここに舞いおさむ」の言葉で見得を切り、堂々の役者振りに、観客をわかせていました。

今秋・国文祭プレフェスティバル開催

10月22日には、「山と地域文化を考える」（朝日町中央公民館）、23日「暮らしと精神文化」（福井市、県生活学習館）、29日には、「人と繊維と文化」（福井商工会議所）のそれぞれをテーマにしたシンポジウムが開かれ、基調講演やパネルディスカッションが行われます。

県内34市町村で開かれる分野別フェスティバルでも、国民文化祭開催市町村実行委員会が立ち上がり、すでにサブテーマを設定するなど開催要項を決めました。

7月以降、県内はもとより各都道府県に向けて参加団体の募集を開始することにしています。

分野別フェスティバルの文化一般部門では、和紙文化フェスティバル（10月22日―27日）いまだて芸術館）、縄文文化フェスティバル（10月22日～11月3日、縄文ロマンパークほか）、恐竜文化フェスティバル（10月29日―30日、勝山市民会館）など、"福井色"をアピールする祭典を繰り広げることにしています。

今年度は、第20回国民文化祭を広く県民に周知し、開催気運を盛り上げるため、国民文化祭のプレ大会が開催されます。10月24日には、サンドーム福井で、オープニングフェスティバルが、また、9月から11月末にかけては、県内43会場で分野別プレフェスティバルが催され、開催市町村、関係文化団体等の連携や取組みを強化して、本番への成功に繋げることにしています。

■シンボルマーク

文化は人間の結束であり、秩序ある生活との統合であります。限りなく広がる文化へのあこがれを、敬意の人形（かた）の構成でイメージしたデザインです。日本古来の古代紫を基調に、明るさを加えて、新しい日本の未来色のイメージにした色彩計画です。

福井商業・グラフィックデザイナー

昨夏・第27回全国高校総合文化祭福井大会で県内高校生が披露した「総踊り」

財団 国文祭分野別フェスティバル 強化策に助成

財団では、第20回国民文化祭と同祭プレ大会の分野別フェスティバルに参加する県内の文化団体の活動を支援するため、助成制度を設けています。

対象団体は、県内の文化団体または共同で活動する文化団体の連合団体です。助成の対象事業は、

▼文化団体が分野別祭典に参加するため技能水準の向上を図る研修会等の開催事業（講師謝礼や会場費を対象）▼文化団体の成果発表や展示等で「ふくい文化」の特色を発信する創作、強化事業（関係必要経費を対象）。

申請書には、推薦書などが必要ですので、詳しいことは財団にお問合せください。

「国民文化祭・ふくい2005」を前に、福井県実行委員会事務局長 大橋直之氏に聞く

Q1、「第20回国民文化祭・ふくい2005」も来年秋に迫り、事業別実施計画も決まりました。今後の取り組みと決意をお聞かせください。

県実行委員会
事務局長
大橋直之氏

A、今回は第20回という節目の記念大会であり、▽伝統文化を継承し、発展させ、▽「ふくい」文化を内外に発信し、▽国内外との交流を深め、▽新しい試みによる祭典を目指します。特に、多くの方々に知恵と力をいただいて、県民の皆様総参加の「第20回国民文化祭・ふくい2005」になるよう頑張りたいと思います。

Q2、国民文化祭福井大会は、「ふくいの文化」を内外に発信する絶好の機会でもあり、福井の特色をアピールする方法は。

A、福井県を全国の方々に知っていただく絶好の機会であり、文化芸術はもとより、産業や観光、そしておいしい食べ物など福井県そのものを見て、聞いて、触れて、食べて、持ち帰っていただく国民文化祭を目指します。

Q3、昨年は全国高校総合文化祭が大成功を収め、また県内文化団体も第4回ふくい県民文化祭を開催して練成を重ねてきました。このような基盤をどのように活かされますか。

A、大会のコンセプトとして「糸」を基軸にしています。いま大事なことは、人と人とがかたく結びあうことです。また、福井県は繊維や和紙など「糸」にゆかりのある仕事や産業の伝統があります。福井県ならではの文化の祭典を織りなすため、それぞれの文化祭を通して培われた絆を活かした豊かな国民文化祭を目指します。

Q4、国民文化祭の成功に向け、広く県民参加の祭典にするため、県民の皆さんへの呼びかけは。

A、国民文化祭は「文化の国体」と言われており、全国の方々に福井県を見て、聞いて、触れて、食べて、持ち帰っていただくために、県民の皆様お一人おひとりの温かいご協力とご参加をお願いいたします。

福井市立郷土歴史博物館訪問

「福井歴史の庭散策ゾーン」の一角を担う新しい福井市立郷土歴史博物館が、今春3月21日オープンしました。

周辺は、東隣りに名勝養浩館庭園、北側に福井城舎人門（とねりもん）遺構も再現、福井城の往時の姿を体験できる空間といえます。

6月初旬、同地を訪問して、楽しく学べる様々の工夫や仕掛けに魅せられました。

常設展示室

目奪う「ふくい遺産」随所に

土蔵をイメージした福井市立郷土歴史博物館正面

ヒストくん

面白い歴博へ へんしん越前屋

玄関から入って、常設展示室へ向うロビーの右奥に、江戸時代の商家と、その前に駕籠が置かれています。称して「へんしん越前屋」江戸時代風の衣装で駕籠に乗ったり大名行列を味うことのできる歴史体験スペースが設けられています。

従来の難しそうな歴史博物館から抜け出し、子どもたちにも面白く、やさしい歴博をめざした身近かな仕掛けでしょうか。訪れた大人たちも、歴史の魅力を感じとっているようでした。

へんしん越前屋・歴史体験スペース

常設展示室に入る前の右側に、館蔵品ギャラリーがあります。今回（5／26～6／27）は、ふくいの弥生時代・原目山墳墓群から出土した壺や器台、鉄刀など副葬品が展示され、「弥生」から「古墳」への時代の移り変わりを知ることができました。

ふくいのあゆみ 「キュンストレーキ」にひっくり

常設展示室は、4つのゾーンに分かれています。まず、人が住み始めた縄文時代から現代までをざっと見わたせる「ふくいのあゆみ」。ここには、先史から近現代にかけての歴史のパネルや縄文土器か

同館のロゴマーク

ふくいのあゆみコーナー

利用案内

交通案内 JR福井駅から徒歩で福井城本丸（福井県庁）を見ながら約10分
- 京福バスで福井駅前11番のりば県立病院線「歴史博物館・養浩館庭園前」下車、徒歩約3分
- 福井北ICから車で約20分
- コミュニティバスすまいる（田原・文京方面）で「江戸上町」下車、徒歩3分

開館時間 午前9時～午後7時
（11月6日～2月末日は午後5時で閉館）

休館日 12月29日～1月4日、展示替え等による臨時休館日

観覧料 常設展示観覧料 ……210円
養浩館庭園との共通観覧・入園料 ……330円

ら福井人絹取引所の看板まで、時代を追った多くの史資料が並べられています。特にドキッとするモノもあります。紙製の男女二体の人体解剖模型「キュンストレーキ」がここに立っています。

これは、江戸時代後期、福井藩の医学所「済世館」で使用するため、ヨーロッパから購入したもので、日本に4体しか現存しない貴重なものです。博物館では、同館のロゴマークのモデルとして使用しています。

古代のふくい　三角縁神獣鏡初めて展示公開

足羽山出土の石棺

「古代のふくい」では、足羽山の古墳から出土した笏谷石の石棺や副葬品をはじめ、近年話題の多い三角縁神獣鏡（花野谷一号墳）など古墳時代のふくいの特徴を示す資料が展示されています。

また、奈良時代の福井平野に広がっていた東大寺領荘園「道守荘」の絵図（実大複製）や荘園の中での日常のひとコマを切り取ったジオラマで探っていけます。

城下町と近代都市　原寸九十九橋 福井城模型も

九十九橋実大模型

九十九橋の展望小模型

「城下町と近代都市」では、越前松平家の城下町として繁栄した江戸時代、また明治・大正・昭和と、都市として大きく変貌していく福井の町の様子を見ることができます。特に、江戸期の半石半木の奇橋「九十九橋」と、その周辺をミニチュアで再現した大ジオラマが目に入ります。橋には、天井に届こうかという、笏谷石製の橋脚、実物大の敷石・欄干など橋の大模型に驚かされます。また、陶板に焼きつけられた城下絵図の上を歩きながら、福井城の復元模型を観察できます。

城下町から近代都市への変貌は、豊富な写真資料で知ることができます。また、戦災、震災という、福井の歴史の暗い部分、そして、そこからのめざましい復興をとげた歴史を見て、昭和の戦後の福井をなつかしく回顧させます。

福井城の模型

幕末維新の人物　松平春嶽公をめぐる人々紹介

幕末維新の人物コーナー

激動の幕末、福井藩は優秀な人材を多く輩出しました。「幕末・維新の人物」では、その人材の登用をはじめ藩政・幕政の改革に力を注いだ松平春嶽公を中心に、橋本左内、由利公正、横井小楠、笠原白鈴、日下部太郎、W・E・グリフィスといった人々を、ゆかりの品などとともに紹介しています。

明治～戦前の写真・資料コーナー

各ゾーンに17種類の情報検索装置

展示室内には、ただ、モノが並んでいるだけでなく、モノに対する理解を深め、より楽しく学ぶことができるよう、各ゾーンに計17種類の映像・情報検索ソフトを配備。ファイバースコープで発掘調査を疑似体験できるコンピューターグラフィックス（CG）など来場者の視覚・聴覚に訴える「分かりやすく親しみやすい」工夫がされています。

企画展示室（2F）　7／24～9／5　福井城大発掘

2階にある「企画展示室」では、年3回特別展覧会が催されます。

第1回目は3月21日から5月5日まで、開館記念特別展として「天下の事成就せり―福井藩と坂本龍馬―」が開かれました。

今回の訪問では、第2回目の特別展が準備中で、7月24日から「福井城大発掘」なるほど福井の江戸時代」をテーマに城下の歴史を探る企画が予定されています。

松平家伝来の馬具など並ぶ「鞍橋にほどこされた蒔絵」展＝松平家史料展示室

松平家史料展示室 福井の重宝 随時紹介

常設展示室入口の左側には「松平家史料展示室」があります。

博物館には、春嶽公記念文庫や越葵文庫など福井藩や松平家、幕末の藩主松平春嶽に関する史料が多く保管されています。ここでは、それらを2ヶ月に一度、展示替えを行って史料や遺品が展示されます。今回の訪問では、越前松平家に伝わる馬具など蒔絵の名品39点を展示した「鞍橋にほどこされた蒔絵」展が開かれていました。（7月20日まで）

松平茂昭が禁門の変の功績として朝廷から拝領した鞍や鐙などの馬具一式。フランスから当時の将軍徳川慶喜に贈られ、松平家に伝わった、洋式馬具ほか、江戸時代の硯箱や印籠なども展示されていました。

歴史のみえるまちの中核・福井歴史の庭散策ゾーン

福井城舎人門往時の姿を再現

福井市では「歴史と文化がみえるまちづくり」を市政の目標の一つに掲げており、博物館の移転新築もその拠点づくりの一環として進められました。また、今日では、福井の顔ともなっている名勝・養浩館庭園とも隣接し、これらの周辺の道路、公園、用水路などが一体的に整備が行われ、一帯は「福井歴史の庭散策ゾーン」として形成され、多くの人でにぎわっています。

博物館のすぐ北側には、石垣や門がつくられ、それらは福井城の一部を再現した「福井城舎人門遺構」です。

この周辺は、いまでは閑静な住宅街ですが、江戸時代には福井城の一部でした。同館の敷地の発掘調査で福井城の遺構が当初の予定をはるかに超える良好な状態で見つかりました。その調査の成果や当時の城下絵図などをもとに、城を守っていた43の門のうちの一つ、「舎人門」とその周辺の外堀、土居、砂利敷道路などが復原され、博物館の屋外展示施設として、福井城の往時の姿を体験できる空間となっています。

福井城舎人門遺構

歴史の庭散策ゾーン

養浩館庭園さらに脚光

養浩館庭園は、福井藩主松平家の別邸で、江戸時代には、「御泉水屋敷」と称され、「養浩館」の名は、明治時代から用いられるようになりました。

養浩館は、数寄屋風書院建築と回遊式林泉庭園による江戸中期を代表する庭園の一つとして広く知られ、学術的にも高い評価をうけている名園です。

昭和20年（1945）7月の福井大空襲で建造物が焼失し、庭園もその後の復興都市計画で一部が市道になったりしました。

昭和57年（1982）国の名勝に指定。これを契機に建造物と庭園の復原事業が進められました。復原は、文政6年（1823）の「御泉水指図」によって計画され、江戸時代の様相をほぼ正確に再生、平成5年から一般に公開されるようになりました。今や内外から多くの人々が訪れ、"福井の顔"となっています。

養浩館庭園・池北西からの景観

シリーズ10 福井の文学碑

越前の里 味真野苑

悲恋のロマンを偲ぶ万葉歌碑

武生市余川町

今から約1260年ほど前、奈良の都で朝廷に仕えていた中臣宅守は、同じく宮廷に仕えていた狭野弟上娘子をめとったことの罪によるのであろうか、越前の国味真野の地へ流刑となりました。別れ別れになった二人は、その別離を悲しみ、再会を誓って恋しあい励ましあった歌を贈り交わしました。

万葉集巻第十五に、宅守40首、娘子23首合わせて63首の恋愛贈答歌が収められています。武生市余川町にある「越前の里・味真野苑」には、二人の代表的な15首の相聞歌が4基の歌碑とシンボル記念碑に刻まれています。

また、今春、二人の贈答歌を中心としたテーマ館「万葉館」がオープンし、「万葉集の世界」を楽しむことができます。

比翼の丘に建つ中臣宅守歌碑

中臣宅守

愛しの　我にもあらぬ　我ゆえに
思ひわぶらむ　妹がかなしさ　（三七二七）

◇現代語訳　塵や泥のように取るに足りない私のことを思って、都で嘆いている娘子のことを思うと、ああたまらない。

西側の比翼の丘に建つ
狭野弟上娘子の歌碑

狭野弟上娘子

君が行く　道の長路を　繰り畳ね
焼き滅ぼさむ　天の火もがも
（三七二四）

◇現代語訳　あなたがこれから流されて行く越前までの長い道中を、手繰り寄せて、畳んで、焼いてなくしてしまうような天の火があったらよいのに。

小高い比翼の丘には、越前海岸の自然石に黒御影石をはめこんだ歌碑が、宅守碑は奈良の方向を、娘子碑は越前の方角に向って建てられています。この歌碑は、「越前の里・味真野苑」が完成した昭和55年（1980）5月に除幕しました。碑文は国文学者・犬養孝氏が万葉仮名のままを揮毫したもので、千古の思いが刻まれています。

二つの丘の間には、山麓から小川が流れ、二人のかぐわしい心と心をかわしつづけた愛の伝説を物語っているようです。

庭池を挟み、贈答歌碑

一方、四季折々に花の美しい日本庭園の池を挟んで、東側に宅守が詠んだ6首の歌碑、西側には、娘子の6首の歌碑が建てられています。

二つの碑は、互に交わした秀歌12首を選び、西本願寺本萬葉集の字体によって刻まれています。この贈答歌碑は、昭和58年5月、武生市が建立したもので、「味真野の恋」悠久のロマンを今に伝えています。

中臣朝臣宅守

あをによし奈良の大路を行き良けど
この山道は行き悪しかりけり（三七二八）

◇現代語訳　立派な奈良の大路は歩き良いのだが、山道は歩きにくいことだなあ。

この一首は「宅守の歌碑」の最初に刻まれている歌で、続いて選歌5首（万葉集巻第十五―三七三〇、三七三三、三七三四、三七六四、三七七六）が刻書されています。

日本庭園の池を挟んで、6首を刻んだ相聞歌碑（娘子の歌碑）

「万葉集の恋の歌」をテーマに、今春、リニューアルオープンした「万葉館」外観＝武生市余川町

奈良の都と越前の里の間で交わされた相聞歌などを中心にパネルや映像で万葉集の世界を紹介しています。

狭野弟上娘子

あしひきの山路越えむとする君を
心に持ちて安けくもなし
（三七二三）

◇現代語訳　これから山路を越えて、遠い越前へ行こうとしておられるあなたのことを、深く心に思っているので、やすらかな気持ちとてありません。

この一首は「娘子の歌碑」の最初の歌で、続いて選歌5首（三七四七、三七五一、三七五三、三七六七、三七七二）が刻まれています。

シンボルゾーンに記念碑

味真野に宿れる君が帰り来む
時の迎へを何時とか待たむ
（三七七〇）
狭野弟上娘子

苑内入り口のシンボルゾーンには、二人の愛を表現したシンボル像の下に、書家の手島右卿氏の揮毫で右の歌が刻まれています。

15年度 風花随筆文学賞

作家 津村節子さん（前列中央）を迎え表彰記念撮影

一般 小堀さん（大阪）最優秀賞
過去最多3747編応募

平成15年度の「風花随筆文学賞」（同実行委員会主催、当財団特別協賛）の授賞式が、3月13日、福井新聞社・風の森ホール（福井市大和田町）で行われました。

同賞は福井市出身の芥川賞作家 津村節子さんの随筆「風花の街から」にちなんで名付けられた文学賞で、平成9年度に創設、14年度から実行委員会形式に衣替えして発足、15年度で7回目となりました。

選考委員長を務められた津村節子さんらから最優秀、優秀賞の11人に表彰状が贈られました。

本年度は、県内外から一般の部1062編、高校生の部2685編、計3747編が寄せられ、過去最高を記録。特に、去年本県で開催された全国高校総合文化祭でのPRなどで高校生の応募が前年より1200点以上も増えました。

入賞の皆さんは次のとおり。

一般の部

▼最優秀賞・福井県知事賞　小堀彰夫（大阪府）「月」▼優秀賞・福井新聞社賞　藤井正男（愛知県）「2通の督促状」▼優秀賞・仁愛女子短大賞　鈴木美紀（東京都）「もうしわけなし」▼優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞　畠山かなこ（福井市）「負けるもんか！」▼優秀賞　帰来富士子（香川県）「男どうし」▼優秀賞　谷門展法（東京都）「ご迷惑おかけします」

高校生の部

▼最優秀賞・福井県教育委員会賞　田中綾乃（福岡工大付属城東高校）「いつでもそれが大事」▼優秀賞・福井新聞社賞　鈴木梢（藤島高校）「帰り道」▼優秀賞・仁愛女子短大賞　伊藤香織（高志高校）「ふれあいを通して」▼優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞　道下愛恵（美方高校）「ありがとう」▼優秀賞　佐々木麻梨奈（仁愛女子高校）「涙の価値」

（敬称略）

げんでんふれあい 作品紹介

母が父と別れたのは、私が13歳の時だった。父は子煩悩なタイプだったが、ギャンブル狂で女好き。私が物心ついた時からそれは変わらず、そしてとうとう家庭が壊れた。お正月が明けると父のいない生活が始まった。その年は年末から冷たい風が吹き、いつ大雪になっても不思議ではないとても寒い冬だった。

北陸の冬は長い。雪が降っては、車が動かなくなる。だからその前にタイヤを履き替える。これは、雪深い地方では当たり前のこと。我が家でも、例年ならタイヤ交換が済んでいる時期だ。しかし、この冬はそうもいかなかった。この力仕事は、たいていの家庭では男の仕事。その男手が家から出て行った我が家では、雪が降り積もるその日までタイヤに気が付く者はなかった。

それは、2月の一段と冷え込んだ夜だった。母は仕事でまだ帰っていない。空と、思わず顔を下に向けた。

その時だった。ふいに風がふわりと吹き付け、思わず顔を上げた。その先にあったのは、母の横顔。玄関の明かりに照らされ、母の顔がしっかり見えた。私は、その時の印象を一生忘れないだろう。何か吹っ切れたような、凛とした強さを持った美しい横顔だった。「こんな事でくじけていたら、あかんのよ。これからは3人なんだから。これから頑張っていくんだから。負けるもんか！」母の目にも、薄らと涙が浮かんでいた。けれど母は手を止めようともせずに、同じ言葉を繰り返した。「負けるもんか。これくらいで、負けるもんか。」そして口を一文字にとじ、せっせと手を動かす。最後の交換が終わると、母は笑ってこう言った。「かなこ、ありがとうね。お母さん、頑張るからね。」家に入ると、妹が部屋を暖かくして待っていた。泣き虫だった妹は、もう泣き虫

私が演劇の主役になったのは夏休みに入る少し前のことだった。私にその役が合っているからなのか、それとも断ることが出来ない私の性格を知ってか、友達に誘われて結局引き受けてしまった。

昭和時代の男の子、こてこての関西弁、長い台詞…。台本を読み終えて、私は「主役」という重い荷物を預かったことをそこでやっと自覚した。後悔と不安が襲う。舞台裏で働こうと考えていたのにと何度愚痴を言ったことだろう。

夏休みに入り、ついに練習が始まった。私の役名は望月健太。彼と私は全く正反対の性格だった。恥ずかしいという気持ちが邪魔をし、健太になりきることができない。いきなり大きな壁を前にし、私は立ち止まった。喜怒哀楽の激しい健太。うれしい時は思いっきり笑い、怒る時はんばった。

本番前日の放課後、部活のステージ練習のとき、私は倒れてしまった。…明日は部活の発表も演劇もある。みんなに迷惑はかけたくない。今まで練習してきたのに。絶対負けたくない、逃げたくない。主役に誘われたときの後悔と不安などはもうどこにもなかった。しかし、体がついていかない。本番当日、最後の練習も結局できずに本番を向かえた。

文化祭が始まる。私はまず部活の発表を終えた。ステージ上で倒れることはなかったが、終わった時点ですぐに崩れ落ち、保健室へ行った。――この後にはまだ演劇が残っている。そんなとき同じクラスのみんなが保健室に来た。クーラーがかかっていて涼しいから来た人も、主役がいなくなると困るから来た人もいると

福井財団賞

一般の部

優秀賞

負けるもんか！

畠山かなこさん（福井市）

からは、雪がはらはらと舞い降り始めている。いつものように妹と戯れあいながら母の帰りを待っていると、突然勢いよく玄関の扉が開いた。「かなこ、ちょっと手伝って！」その声に呼ばれ外に出てみると、母がタイヤ交換を始めていた。去年までは、父と母が二人で行っていた作業。けれど今年は父の車の分だけ広くなったお駐車場で、母が一人で動いている。その夜は隣近所の家でも同様に、タイヤ交換をしている人の姿が見られた。けれど、どの家も作業しているのは一家の主。男の姿だった。

必死になり作業を続ける母の姿を見た途端に、年が明けてからずっと抑えて続けていた感情が私の中で溢れ出した。父はもういない。急に悲しくなり思わず母に駆け寄ったが、その想いは声にならなかった。雪が降りしきる暗闇の庭で、泣きながら母の姿を見つめた。

「かなこ、ちょっとココを持っていて。」その言葉に我に返り、私は母の横にしゃがみこんだ。白くて大きなほた雪が、無情にも降り積もって行く。明日は、雪がたくさん積もっているに違いない。そんな心配をよそに、母はテキパキと動く。けれど母も何かを感じていたのだろう。手を動かすだけで、何も話そうとしない。長くて重たい時間が、雪とともにゆっくりと過ぎていく。「どうしてなんだろう。どうしてお父さんは…。」頭の中で、出せるはずのない答えを探していた。指先がかじかみ、止まったはずの私の涙は再び溢れ始めた。その涙を母に気付かれまいではなかった。長い冬の始まりは、私達にとって新しい季節への出発になった。

あれから十年間、母は文字どおり昼も夜も働いて二人の娘を育て上げた。母に反発した時もあったが、そのたびにあの時の母の横顔が頭に浮かんだ。母の愛情の深さが、私たち姉妹をいつも支えていた。そして今年、母は52歳を迎えた。まだまだ人生の折り返し地点、これからが彼女の人生本番。けれどこの不況の世の中。生きることに精一杯で、暮らしの中に埋もれそうな母の姿がある。その疲れた横顔を見るたびに、私は彼女を元気づけるすべを探す。今、彼女を元気付ける為に何が出来るだろう。決して豊かとは言えない生活の中で、どうやって恩を返せばいいのか。けれどそう想い悩むたびに、13歳の時に見た母の横顔が私に元気をくれる。「負けるもんか。」というあの声とともに。

私もいつか、あの時母が見せてくれたような、凛とした強さと美しさを合わせ持つ愛情の深い人間になりたい。そして、自分の夢も母の幸せも全てを諦めずに精一杯頑張っていたい。その姿を母に見せていくこと。これが、私にできる母への唯一の恩返しなのではないか。迷い悩む前に、ひたすらに頑張って進む。これが私に出来る、精一杯の恩返しだ。こうして私はいま、夢に向かって突っ走っている。私は負けない。負けずに頑張っていくから。お母さん、どうか私を見ていて下さいね。「負けるもんか！」

高校生の部

優秀賞

ありがとう

道下愛恵さん（美方高）

大声で怒鳴り、そして泣きたいときはぼろぼろと涙を流す。それが私にはとても難しいことだったのである。他のみんながどんどん役になじんでいくたび私は焦り、そのたびに壁は高くなる一方だった。

そのとき私を変えたのは健太の言葉だった。『俺は決めたんや。今を一生懸命生きるで。今を一生懸命生きてたら、明日死んだかて、一時間後死んだかて、絶対後悔せんと思うねん。』私は健太に近づくため、普段から健太ならこういう場合どうするのだろう、健太ならどう思うだろうと考え、行動にうつすようにした。今をがむしゃらに一生懸命生きた。

今年の夏休みは短縮され、演劇の本番まで時間はほとんどなかった。夏休み中の部活も今年は特別忙しかったためにスケジュール帳はいっぱい。私も含め、メンバーがそろわないことが多かった。このままで本当にできるのだろうか。そう思うこともあったが、練習は大好きだったから沢山たくさん練習した。みんなと一つのことに取り組むのはとても楽しかった。たまに私たちの演技で泣いてくれる人もいた。メンバーがそろわなかった時はその役を代わりにしてくれる人もいたし、アドバイスをしてくれる人もたくさんいた。だから期待に答えたかった。健太ならきっとこういうとき期待以上のことをするだろうと思った私はもっとが思う。それでも嬉しかった。泣きながら心配してくれた人、私を笑わせて元気にしてくれた人、大丈夫？と声をかけてくれた人、みんながいたから私はステージに立てた。机に顔を伏せたところから演技が始まる私でも、幕が開き、光が入ってくるのがはっきりとわかった。そこからは何も覚えていない。最後にぼろぼろと涙をこぼし、大声で最後の台詞を叫んだこと以外は。

数日後、私はビデオで自分たちの演技を見た。汗と涙でぐちゃぐちゃになった私の顔は見ていられないほどの醜いものだった。それでもみんなは感動し、泣いてくれた。ステージ上で一緒に演劇をつくったみんなも、観客として私たちの演技を見てくれたみんなも。だから私も泣くことができた。そのときの私はきっと、一番健太に近づいたのだと思う。演技という面だけでなく、私自身が健太のように素直になれたときだった。自分の気持ちをそのまま表に出す。一生失いたくない宝物を見つけた気がした。

ふるさと福井
人物シリーズ

松木庄左衛門（上）

―大老をも動かした若き義民―

文／永江秀雄

今から三百五十年ばかり前のこと、慶安五年（一六五二）五月十六日、若狭の義民松木庄左衛門は、刑場の日笠河原を朱に染めて、十字架上に二十八歳の生涯を閉じました。

若狭の人々が今も「松木さん」と親しく呼んで敬礼するこの義民と、その時代を、伝承と記録を重視しつつ、ここに述べて参ります。

肖像画／上中町、松木家蔵

築城と年貢の増徴

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦で徳川方に味方した京極高次は、その功績により、戦後に家康から若狭国（福井県南西部）八万五千石を与えられました。若狭の領主となった高次は、その翌年の六年から、それまで小浜（小浜市）の後瀬山にあった城を廃止して、小浜湾に臨む雲浜（その当時の漁村、今の小浜市竹原・小松原）の地に、新しい城を築くことにしました。

そのため、打ち続いた戦乱に疲れきった若狭の農民や町人たちの上に、またもや過重な労役や年貢の増徴という苦しみが加えられることになりました。特に百姓たちが米と同じように納めていた年貢の大豆が、一俵四斗（約七二リットル）入りから、にわかに一俵四斗五升（約八十一リットル）入り（「拾椎雑話」には五斗入り）に増額されたのです。

そうでなくても苦しい農民たちは、これをどうか元の通り、京極氏の前の領主であった木下勝俊のときのように一俵四斗入りに戻してほしいと願い続けました。しかし、城ができ上がるまでは辛抱しろといわれて、農民の願いは聞き入れられません。

京極氏による築城は、七年目の慶長十二年には、おおむね完了したようですが、その二年後に、高次は小浜城中で亡くなりました。天守閣だけがまだできていなかったので、父の跡を継いで若狭守に任命された京極忠高は、天守を築こうとしました。ところが、その基礎を築いただけで、寛永十一年（一六三四）に、三代将軍徳川家光から出雲・隠岐（ともに島根県）の二十六万四千二百石を与えられて国替となり、出雲の松江城へと移っていきました。

京極家が築城を始めたとき、その土地に住む村人をみなほかに移住させたり、小浜湾に注いでいる二大河川（南川・北川）を濠として利用するために大工事を行ったり、いろいろと難しい事業が続けられました。

小浜に伝わった古文書（「桑村文書」）を見ると、若狭の海岸一帯の舟が召集されて石を運んだり、遠く秋田の野代（今の秋田県能代市）まで板を積みに行かせられたこともわかります。また、「稚狭考」には、城郭や石壁を造るために、石仏や古墳の石なども集めたこと、女の人も動員されて砂運びをさせられたことなども記されています。

なお、京極高次は、浅井長政の遺児である史上に有名な淀君の妹を娶っており、また、彼女の末の妹は、徳川二代将軍秀忠の妻となっていました。さらに、秀忠の第四女が京極高次の長男である忠高に嫁いできたことをみても、当時の京極家の権勢が想像されます。

寛永十一年、この京極氏に替わって若狭の小浜藩主となったのが、酒井忠勝です。忠勝は将軍徳川家光に仕えて老中となり、十五年には大老ともなった有名な譜代の大名です。将軍の信任も厚く、幕府の中でも大きな実権を持っていました。

新しい国主を迎えた若狭の農民たちは、「好機が来た」とばかりに、年貢の引き下げを願い出ました。しかし、農民の期待に反して、小浜藩の役人たちは、「前の殿様京極家には命令どおり多く納めていたものを、領主が替わったからといって年貢を減らせとは、酒井家を侮るもはなはだしい」といって、農民たちの願いはたちまち一蹴されました。

小浜城跡（天守閣跡）

像顔の像（上中町住民センター前）
義民松木庄左衛門像

〈注　記〉

平成2年6月、社団法人農山漁村文化協会発行の「江戸時代人づくり風土記18ふるさとの人と知恵・福井」、及び平成15年3月、上中町教育委員会発行「松木庄左衛門」に、今回掲載の同主旨の発表がされており、特に本誌への掲載については上中町教育委員会のご協力をいただきました。（編集部）

繰り返される嘆願

酒井忠勝が若狭に入国して数年のうちに、早くも見事な天守閣が造られて、ここに新しい小浜城は完成し、城下町の体裁も備わった、と伝えられています。すなわち、酒井氏の時代に入ってから天守台も新たに築き直され、続いて三層の立派な天守閣が築かれて、寛永十三年（一六三六）十月ごろに完成したといわれます。

京極家の時代から、「城ができ上がったら、年貢の大豆も四斗俵に戻す」といわれながら、いつまでたっても年貢の引き下げが実行されません。

その後も城の工事や城下町の整備が、繰り返し行われるのでした。最終的には正保二年（一六四五）まで、関ヶ原の戦の翌年から実に四十数年間にわたって築城工事が続けられることになるのです。

大豆だけでなく、農民の納める米の年貢も、もちろん厳しいものでした。その一例として、京極忠高のとき、元和五年（一六一九）に、家老が連名で熊川村（今の遠敷郡上中町熊川）の農民あてに出した年貢の割付状が、今もこの地に残されています。それによると、この村の米の生産高の「七ツ五分を年貢として納めよ」と命じています。七ツ五分とは七五パーセントのことで、これは特に異例とも思われる高率な年貢です。

また、京極家のときにも酒井家の代にも、小浜藩では「おり米」といって蔵米を高い値段で町家に貸し付けることが行われました。農民から厳しく取り立てた米が、このようにも使われたのです。小浜の町人が書いた『拾椎雑話』の中に、京極忠高のとき、「おり米」を批判して、

おり米の値は、ただたか（忠高）に
したなれば　けふごく（京極）くわ
ぬ浜の町人

という落首をしたものがあり、取り調べられて死罪になったとあります。「おり米」の値をやたらに高くすることを領主の名にかけて歌った鋭い風刺が、とがめられたのです。

酒井忠勝のときにも、「おり米」に困った町人たちが、訴えを起こそうとして集まり、小浜の八幡神社で早鐘を突き鳴らしました。幕府の老中、あるいは大老として、ほとんど江戸にいた忠勝が、ちょうど小浜に帰っているときで、その耳に入り、「棟梁三人を磔にせよと命ぜられた」という古文書も残されています。また、早くから、苦しさに耐えかねて他村や他国へ逃亡する農民もあり、これを「走り百姓」とか「欠落百姓」といって、厳格に取り締まった掟書も多く見られます。

このように、当時は領主や役人の取り締まりもはなはだ厳しいものでした。しかし、農民たちも辛抱できなくなり、とうとう若狭全村二百五十二ヶ村の庄屋や総代が集まり、大豆年貢の引き下げを実現するため、対策が協議されました。寛永十七年（一六四〇）の秋のある日、遠敷大明神をまつる神社に集まったといわれています。

庄左衛門の決断

明治四十四年（一九一一）熊川村役場編纂（初代村長逸見勘兵衛翁稿）による『松木長梁氏之伝記』その他によれば、事の次第は次のようなものでした。

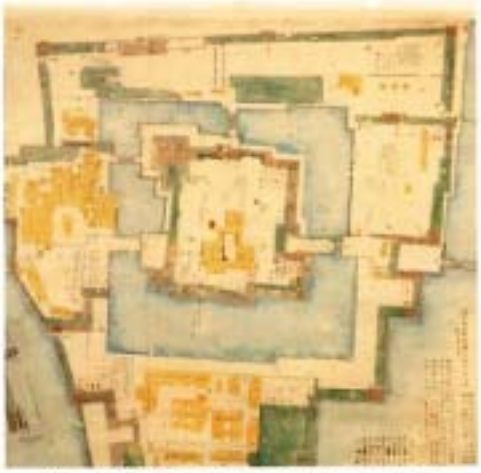
このとき、みな思い思いのことを言い、怒る者や嘆く者など、どうしたらよいのかわからず、話がいつまでもまとまりません。ここで、最も若い上中郷新道村（今の遠敷郡上中町新道）の庄屋松木庄左衛門が立ち上がりました。そして、

「みなさん、今日の集まりの目的は、年貢の大豆を四斗俵に戻してもらうためにあるのです。いろいろ議論して時を費やしていてはなりません。この願いを文書に認めて、この中から代表者を選び、お上へ差し出すのが、一番良い方法だとおもいます」と、言いました。

経験年数の長い多くの庄屋たちも、十六歳の庄屋松木庄左衛門の言葉に感心し、異議もなく同意しました。そして、直ちに嘆願書が作られ、二十名ばかりの代表、すなわち陳情団が選ばれました。その中でも最高位に選ばれたのが、庄左衛門であったということです。

しかし、農民たちの切実な申し出は、やはり藩の役人には聞き入れられませんでした。再び願い出ては拒否され、また、願い出る、ということが繰り返されて、九年にもおよんだといわれています。農民たちは、苦しい事情を礼を尽くし言葉を尽くして申し述べ、大豆年貢の引き下げを陳情嘆願するのですが、全く無駄でした。農民たちの困窮と不満はつのるばかりです。

（次号に続く）



江戸時代後期小浜城絵図　小浜市立図書館蔵

松木庄左衛門生誕の地（現上中町新道）

作者の横顔

永江秀雄氏
郷土史家

上中町文化財保護委員、県史編纂民俗部会執筆委員、上中町教育委員等を努められ、昭和57年から22年間県立若狭歴史民俗資料館嘱託として、民俗・伝統文化の調査・研究に取り組まれ、特に熊川宿や鯖街道の保存・継承に多大の功績を残されました。

平成12年、文化財保護法50年記念特別功労者として文部大臣表彰、平成13年当財団のげんでんふるさと文化賞を受賞。　上中町関（77歳）

シリーズ ふくいの伝統行事

福井県指定無形民俗文化財 椎村神社の祭り

小浜市 若狭

小浜市若狭・宇椎に鎮座する椎村神社の春祭りは、5月5日（本祭り）朝、同神社に氏子連中約20名が集まり、祭礼神事が行われた後、古い伝統をうけ継いだ二人立ち獅子舞と王の舞が奉納されます。

この祭りは、民俗豊かで、祭礼行事の古い形態が守られており、本年4月、福井県無形民俗文化財に指定されました。

若狭区は、内外海半島の付け根、小浜湾の西入江に位置し、現在12戸、半農半漁を営む小集落です。同集落は、古くは椎村神社の所在する西浦の台地にありましたが、藩政時代、鉄の精錬が行われるために、現在の地に全戸が移住したといわれています。

椎村神社の祭神は青海首椎根津彦命、大山祇命（大正時代に合祀）とされ、祭りの由来は鎌倉～室町時代に始まったと推定されています。

春祭りは、5月4日の宵祭り、5日の本祭り、6日の行事に大別されます。

古式を守り王の舞を奉納

5日の本祭りを追ってみました。

10時ごろ、氏子連中は、集落から約1キロ離れた神社本殿前に集まり、神官が主宰して祭礼神事が執り行われ、区の繁栄や五穀豊穣を祈願します。

続いて、境内で、太鼓の音に合わせて、二人立ち獅子舞が奉納されます。

獅子は尾を中心に、円を描くように右回りに飛ぶような足取りで2回旋回、太鼓の乱打で後ずさりして舞いが終ります。全体には簡素な舞いですが、古い伝統の仕ぐさをのこしています。

この後、勇壮な王の舞が奉納されます。この舞いは「天狗舞」ともいわれ、天狗の面をつけたツキヤク一人が御幣の垂れをつけた鉾を右脇にかかえ、太鼓の音に合わせて、足を大きく上げながら右回りに活歩。後半、鉾を力強く地に刺す仕ぐさで舞いを納めます。この舞いは災厄を遊け、作物を荒らすシシ退治を模していると伝えられています。

11時過ぎ、ご神体を迎えた神輿は、黒装束の男衆8人に担がれ、集落に向って、渡御行列が始まります。行列の順番は、鉾持ちを先頭に、太鼓担ぎ、榊持ち、小神輿（獅子頭が納められている）、稚児、当番、御幣、祝宜、神輿と続き、太鼓を叩いて威勢よく、「サンヨウレイ……」と大声で叫びながら、県道を通って集落の広場までの道のりを行進します。

集落に着くと、村の広場に設けられたお旅所に神輿を据え、区民や市内外からの観光客を前に、再び獅子舞と王の舞が披露されます。その後、獅子頭は担当役に担がれ、太鼓を叩いて集落の氏子まわりを行い、最後は神事宿に安置されます。

祭事の古態を継承

この五月の祭りは、地区内の各年齢層の参加や役割分担で維持されており、また、穢（けがれ）を避け、伝統を厳守しようとする姿勢などが、随所にみうけられ、祭り行事の古態を今に伝えています。そのいくつかの例を拾ってみました。

祝宜は区構成の戸主のうち最年長者が就き、祭りの執行を実質的に取り仕切ります。稚児（女児）は平な桶に「粽」（ちまき）を納めた「神様の弁当持ち」として神事や渡御行列に加わります。

榊持ちは男児とされてきました。若者集団は、太鼓担ぎや祭り当番宿の接待役、幟立てや幟下ろしなどを勤めます。

本祭りの早朝、参加者は潮垢離をして身を浄め、決まりの装いをするなど随所に民俗を豊かに包括した特色が今に伝えています。

獅子退治の様子を模して演じる王の舞＝椎村神社境内

神社から集落まで神輿を担ぎ渡御行列

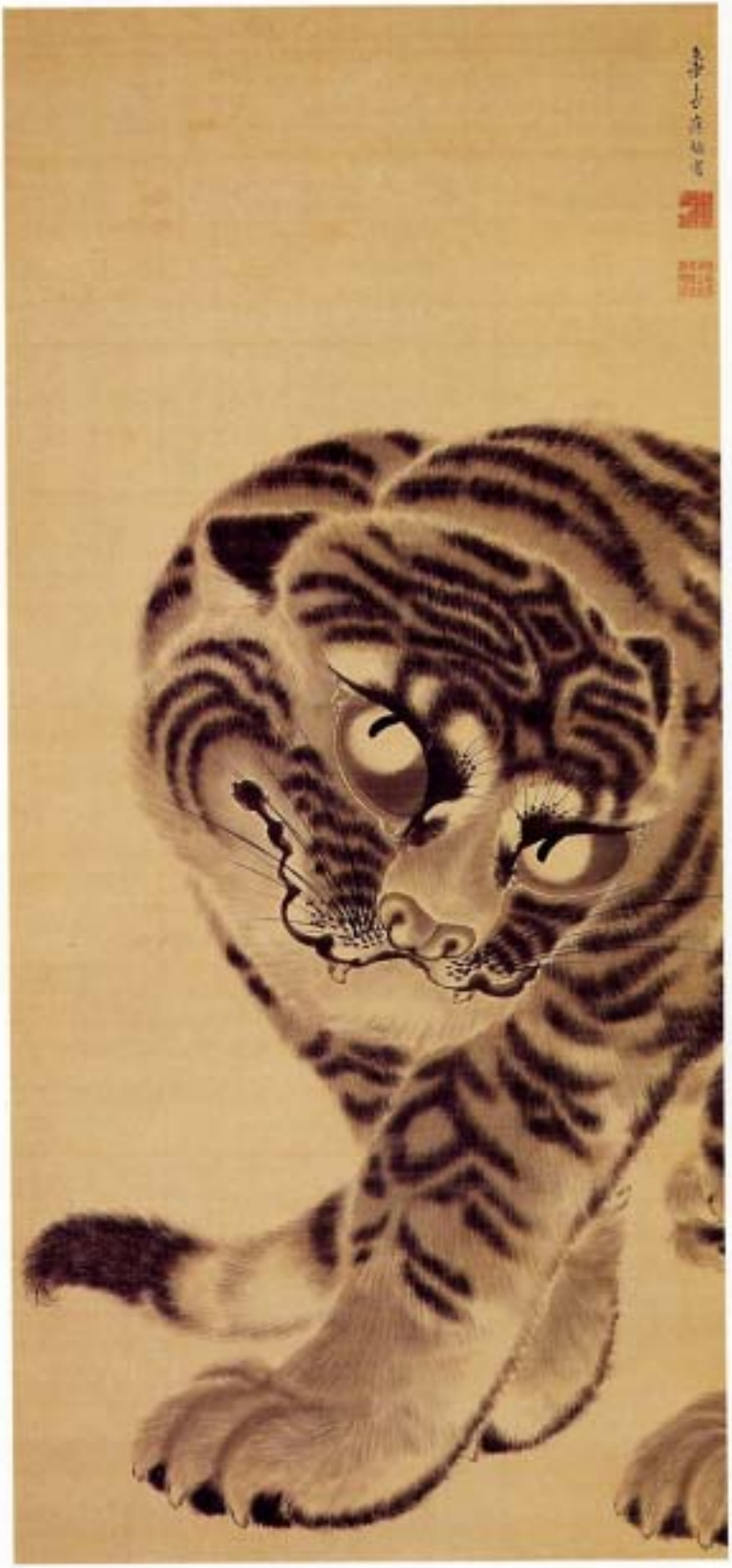
尾を中心に旋回して舞う二人立ち獅子舞＝若狭区お旅所広場

小浜市若狭区椎の山腹に鎮座する椎村神社

敦賀市立博物館所蔵 逸品絵画誌上展 14

敦賀市立博物館では郷土にゆかりのある作家や師弟関係などでつながる近世・近代絵画を系統的に収集しています。

猛虎図 一幅 岸駒筆



- 絹本墨画
- 縦118.5　横53.8cm
- 江戸中期
- 落款　蘭齋岸矩写
- 印章　上下印とも「印文不読」

本図は猛虎の全姿態ではなく、頭をやや傾けて前方をうかがう大きな顔面と、それに太い前足を強調した画面構成に描かれています。

この図が描かれたのは、岸矩から岸駒に改名した天明4年（1784）以前で、ほぼ岸駒の30歳代中頃の制作と思われます。

寛政11年（1799）、清人より虎頭と四脚が送られたあたりから、岸駒の虎画は実物のそれに近似していきます。

本図の虎を同時代の円山応挙の虎画と比較するに「猫虎」風はあるものの、眼光の鋭さ、口元の威圧感、前足の自然な柔軟さなど、応挙より実物らしく、後年の虎画の名手たる片鱗をうかがうことができます。

岸駒は寛延2年（1749）金沢出生とする通説に対し、同年、高岡出生説、宝暦6年（1756）出生説などがあります。（以下年齢は通説に従い記述。）

本姓は佐伯、岸氏、号は蘭斎・草陽・可観堂・虎頭館などがあります。安永4年（1775）27歳、名を岸矩と改めました。天明4年（1784）36歳、有栖川宮家に召されて雅楽助を賜り、字を真然と付けました。享和2年（1802）53歳、禁中生火官人に補せられ、従六位下主殿大属に叙任。文化5年（1808）60歳、越前介に転任。天保7年（1836）88歳、職人所衆、従五位下に補せられる。翌年89歳、越前守に任ぜられ、同9年（1838）90歳で死去。

岸駒の絵画修行については、特定の師はなく、ほとんど独学で、沈南蘋をはじめ中国明・清画を研鑽、さらに狩野派や西洋画も学習し、岸駒独自の画風を形成しました。

げんでんふれあいコンサート2004 4/9

ゲストに森山良子さんとチェン・ミンさん 福井

熱演する森山良子さん（右）とチェン・ミンさん（左）

財団では、「げんでんふれあいコンサート2004」（福井放送後援、日本原電協賛）を4月9日、福井市のフェニックスプラザで開きました。

この公演には、北野タダオ・アロージャズオーケストラ（AJO）とゲストに歌手の森山良子さん、二胡奏者チェン・ミンさんを招き、ビックバンドと初めて共演する豪華な企画に、会場に詰めかけた約2千人のファンは陽春の熱気に満ちたスプリング・ライブに酔いしれました。

ステージは、2部構成で進められ、AJOの軽快なジャズ音楽で幕開け。中国の伝統楽器の二胡奏者チェン・ミンさんが「音楽には国境はない」ことなどを流暢な日本語で語り、二胡の幻想的で哀愁漂う響きを披露。また、「蘇州夜曲」「月の砂漠」の名曲や「燕になりたい」を楽団と共演して、大きな拍手に包まれました。

第2部では、グレンミラーメロディの演奏に始まり、森山良子さんが「悲しい天使」や自らのギター伴奏で「さとうきび畑」を独唱し、会場を盛りあげました。

最後に、全出演者が勢揃いして、ジャズソングを熱唱、熱演、会場のアンコールに応えて、「涙そうそう」「Blood, sweat and tears」を歌い上げ、フィナーレを飾りました。

文化講演会 敦賀女性ネットワークと共催 4/25

「祇園の教訓」の岩崎さん招く 敦賀

客席で自由な質問に答える岩崎峰子さん

財団では、敦賀女性ネットワークと共催して、4月25日、敦賀市プラザ萬象で文化講演会を開き、会員ら約300名が参加しました。

講師には、京都の祇園で、若い頃、華やかな花柳界を歩まれ、現在、作家として活躍中の岩崎峰子さんを招きました。

岩崎さんは、京都祇園甲部の花柳界の歴史や廓と花柳界の違いを説き、甲部芸妓は伝統的な古典芸能を保持する自立した女性の職業であること。また、座敷で知った一流の客人の生き方から「輝く魅力の人生」の一端を知ったことなど「祇園の教訓」をありのままに語られました。

講演半ばからは、会場の客席に降り、自由な質問を通して、祇園での生活環境やきびしい芸能生活を明らかにされ、正しい花柳界の姿を理解してほしいことなどを訴えていました。最後に、京舞井上流の伝統ある日本舞踊を清元にあわせて舞い、四世井上八千代師匠の直弟子として錬成された京舞の優雅な舞いを披露し、会場から大きな拍手が送られました。

県高等学校文化連盟から財団に感謝状 5/18

県高文連東光会長から感謝状をうける当財団の山田専務理事

5月18日、福井市の県職員会館で開かれた福井県高等学校文化連盟（会長・東光正浩氏）総会において、当財団に感謝状が贈られました。

これは、昨年の全国高校総合文化祭福井大会が成功を収めたことや、財団が平成11年度より県内高等学校の文化部活動を育成するため、毎年度助成を通じて支援を続けてきたことが評価されたものです。

当日は、財団から山田専務理事が出席し感謝状を受けたお礼と今後も県高校文化部活動の活性化のために、引き続き支援事業を進めることを伝えました。

16年度財団助成事業決まる

助成総額 2097万円・108団体

県内の文化団体等の事業活動を支援する平成16年度の財団助成事業は、4月末日で公募申請を締め切り、4月6日と5月13日の2回に分け、選考委員会を開催し、慎重な審査を行いました。その結果の答申をうけて、本年度は、108団体に対し、総額2097万円の助成交付金を決定しました。

助成対象事業別の交付決定額は下表のとおりとなっています。なお、本年度初めて助成対象となった団体は、43団体で、全体の40パーセントを占めました。

平成16年度　財団助成事業交付金一覧

事業大別	助成対象事業	団体数	助成交付額
地域文化の振興事業	郷土の歴史・文化の保存伝承事業	13	2,210（千円）
	市民文化団体等の活動事業	23	4,200
	国際文化交流事業	4	800
	文化アドバイザー派遣事業	1	1,000
	文化のまちづくり事業	11	2,150
ふれあい及びゆとりの創造事業	ボランティア団体等活動事業	20	2,270
	各種文化サークル活動事業	11	1,100
	環境保全等地域づくり事業	10	1,240
芸術鑑賞機会の提供及び文化創造事業	優れた芸術公演・展示開催事業	3	800
	市民参加型芸術文化活動事業	11	3,700
福井県高等学校総合文化祭育成事業		1	1,500
合　計		108	20,970

文化講演会 県連合婦人会と共催 7/3

異色の牧師　金沢さん熱弁をふるう　福井

異色の人生経験を披露しながら熱弁をふるう金沢さん

財団では福井県連合婦人会と共催（日本原電協賛）して、若い頃ヤクザの世界に染まり、28歳で更生、現在、弟子協会の牧師として活躍しておられる金沢泰裕さんを講師に招き、7月3日、福井市の県生活学習館で文化講演会を開きました。

講演会には県内の地域婦人会のリーダーら約500人が参加。講師は「親が変わらなければ、子も変わらない」をテーマに、異色の人生経験を披露しながら親と子の関係や青少年問題など今日の時宜にかなった話題を熱弁。会場では、メモをとるなど真剣に聞き入っていました。

金沢さんは、中学時代から非行に走り、高校入学と同時に暴走族に、18歳のときにはヤクザの世界に入り、バクチ、抗争、覚醒剤など悪のかぎりを尽くしたという。28歳の時、父親の死に直面し、イエス・キリストとの出会いで目覚め、今は伝道に勤しむ平安の道を切々と語っていました。特に、親と子の関係について触れ、「親は子供とのスキンシップを大切にすること。や「子供に賞める言葉をかけよう。また、「子供に心のこもった贈りものを。」など五つのポイントをあげ、大人と子供の環境づくりの大切さを訴えていました。

東京佼成ウインド オーケストラ公開クリニック 6/26・27

高校生らプロ楽団の技を学ぶ　福井

指揮者の指導を受け、一緒に演奏する参加者＝県立音楽堂

国内屈指の吹奏楽団、東京佼成ウインドオーケストラを招き（県文化振興事業団、福井新聞社主催、当財団協賛）、6月26・27日の両日、福井市の県立音楽堂で、「2004ふくい吹奏楽フェスティバル」が開かれました。

初日26日には、県内の演奏者たちにプロの技術を直接指導する「公開クリニック」が行われました。

前半は、本年の全日本吹奏楽コンクールの課題曲を題材にした「吹奏楽クリニック」が行われ、公募で選ばれた高校生や県内の吹奏楽団に所属する団員ら約百人が同オーケストラと同じ舞台に上がり、常任指揮者のダグラス・ポストック氏から楽器ごと、また曲のパートごとに印象的な演奏法が説明され、きめ細かなアドバイスが行われました。

後半では、「指揮法クリニック」が行われ、学校吹奏楽部の顧問を務める教員など4人が参加。実際に同オーケストラを指揮し、ポストック氏から、タクトや手の動き、指揮台での立ち方などの教えを受け、参加者たちは、一流楽団の技を真剣に学び、聴き入っていました。

「若狭良民伝」を財団共同発刊

若狭路文化研究会と企画事業

平成11年より、嶺南地方の民俗資料の収集、調査・研究活動などを行っている「若狭路文化研究会」の企画事業、第二弾として「若州良民伝」復刻版が、同研究会と当財団の共同刊行のかたちで、この様ど発刊しました。

江戸時代、幕府や諸藩が庶民教化政策として、忠孝、貞節、善行など儒教的な徳目に見合った庶民を選び、これを表彰し、領民の範とした、その事跡を出版した史料がいくつか残されていますが、「若州良民伝」もその一書です。今回、現代語訳を取り入れ、当時の庶民が日常、どうした暮らしをしていたか、事跡ごとに挿絵が描かれていることなどからも、往時の生活文化史をみる興味深い内容となっています。この書がふるさと福井の民俗文化を学ぶ手引きとなることを願い、公立図書館等に配付することにしています。この復刻版はB5判、375ページ。

武生市文協創立50周年を祝う 6/11～20

記念美術展を盛大に開催　武生

創立50周年記念美術展＝市公会堂記念館

武生市文化協議会（会長山田石雲氏）の創立50周年記念式典が6月12日、武生市内のパレスホテルで開かれました。

式典には、三木勅男市長、西藤正治県教育長ら会員約250名が出席。市文協設立からの歩みを振り返り、さらなる発展を誓っていました。

会長挨拶のあと、同協議会の発展に貢献された書家の飯澤景舟さんら9個人、13団体に感謝状が贈られ、引き続き、祝賀会を開催。琴、太鼓、バレエ、日本舞踊など会員らが日頃の練習の成果を披露し、節目の年を祝いました。

また、記念美術展が同月20日まで、市公会堂記念館で開かれました。

絵画、造形、日本画、写真、書道、彫刻部門など97点の作品と故杉本長雲さんらの遺作展の部も設けられ、作品は、地域における美術活動で錬成された自信作揃いで、訪れた人々は、じっくりと鑑賞していました。

第20回国民文化祭・ふくい2005プレフェスティバル参加事業

テーマ 今に息づく「ふるさとの素顔」

賞金			
	ふるさと大賞	1点	賞状・トロフィ・賞金30万円 ※但し、高校生の場合は、賞金相当額の記念品とする。
	ふるさと賞	3点	賞状・トロフィ・賞金 学生:5万円1点／一般:10万円1点／女性:10万円1点
	優秀賞	6点	賞状・トロフィ・賞金 学生:3万円2点／一般:5万円2点／女性:5万円2点
	入選	35点	記念品 学生:記念品5点／一般:記念品20点／女性:記念品10点
	佳作	35点	記念品 学生:記念品5点／一般:記念品20点／女性:記念品10点

募集要項

●テーマ

今に息づく「ふるさとの素顔」

●部門

学生部門（高校生以上）・一般部門・一般女性部門の3部門

●資格

①福井県に在住又は、学校・勤務先が福井県内であること。
②写真の専門家（プロカメラマン）ではないこと。

●作品

応募点数は制限しません。ただし応募者本人が県内で撮影された未発表作品に限ります。

●作品の規格

カラー・モノクロで四ツ切、又は四ツ切Wの単写真のみとします。

●締切

平成16年12月10日㈮　当日消印有効

●審査・発表

・入選作品は審査委員会（委員長:八木隆氏他6名）で選考
・平成17年1月下旬発表

●応募先及びお問い合わせ先

①914-0051　福井県敦賀市本町2丁目9番16号
（財）げんでんふれあい福井財団
☎(0770)21-0291 FAX http://www.genden.or.jp
②福井県カメラ商組合店及び県内フジカラー取扱店

●応募方法

所定の専用応募用紙に必要事項を記入し作品の裏に、セロテープで貼って提出してください。

●表彰

表彰式／平成17年2月7日㈰　（ふるさとの日）
その後、敦賀、福井市2会場にて写真展を開催し、作品を広く県民の皆さんに公開します。

●その他

①2002年～2004年に撮影したもので、自作の未発表作品に限ります。
②入賞者には、原版（ネガ・ポジ等）の提出を求めます。
③応募作品は返却しません。但し、返却を希望される方は「返却希望」と封筒に朱書きし、500円切手を同封して下さい。
④入賞、入選作品の使用・著作権は主催者に帰属し、財団のPR活動等に使用させていただきます。

主催:（財）げんでんふれあい福井財団

後援：福井県／福井県教育委員会／敦賀市／敦賀市教育委員会／（社）福井県文化協議会／福井県高等学校文化連盟／（株）福井新聞社
福井放送（株）／福井テレビジョン放送（株）
協賛：福井県カメラ商組合／富士写真フイルム（株）／フジカラー北陸（株）

財団イベント　INFORMATION

「風の歌・森の響」 土井啓輔&谷川賢作コンサート	土井啓輔（尺八）& 谷川賢作（ピアノ）	9／12㈰	福井市・ 福井新聞社風の森ホール	福井新聞社と共催 入場料　3,500円
第8回福祉演芸会	ゼンジー・一億（マジシャン） 林田麻友子（歌手）	10/19㈫～21㈭	県内6福祉施設	入場無料
海・山・音楽 福井ロックフェスティバル 04	福井県出身のアーティスト出演	10／12㈫	福井市・響きのホール	FM福井に協賛 入場料　2,500円（予定）
狂言を楽しむ会	人間国宝　茂山千作師一門	11／4㈭	敦賀市・プラザ萬象	入場無料
げんでんふれあい スペシャル	「春にして君を離れ」舞台公演 大和田伸也　演出・主演	11／6㈯	敦賀市民文化センター	入場料　2,000円

「げんでんふれあい福井」第19号
2004年7月発行

財団ホームページ　アドレス　http://www.Genden.or.jp
（発行）財団法人 げんでんふれあい福井財団
〒914-0051　福井県敦賀市本町2丁目9番地16号（日本原子力発電(株)敦賀地区本部4階）
TEL.0770-21-0291 FAX.0770-21-9070